



遠い国のおはなしシリーズ

無益な殺生

苔田 カエル

遠い国でのおはなしです

今 思い出したんですけどね
あたし 昔 鮎だったんですよ
高い 高い お山にある
清らかで 穏やかな湖でした

鮎 あゆ

とっても良い所でしたよ
夏は涼しく 冬は暖かで
底からは 水草なんか揺らいじゃって
食うにも 寝るにも 困りやしない

海？ ああ 遡上ね
行ったり来たりするやつでしょ
そんなもん しないね
御苦労なこったいね

遡上 そじょう

昔 昔 大昔のことですがね
そこ 海だったそうなんですよ
それが むくむく～って
盛り上がっちゃってね

気が付いたら お山の上だ
びっくりしただろうね 当時の鮎ときたら
上ろうたって それ以上ないんだから
飛び上がったなら地の底だ おっこちゃって

そんな昔のこと 何で知ってるんだって
湖の主ってのがね 教えてくれたんですよ
聞いちゃいもしないのにね
いるでしょ そういう人

無駄に長生した やたら物知りの爺でね
あたし達と違って 寿命は長いんですがね
だからって生きちゃいませんよ そんな昔
代々 語り継がれてきたんじゃないですか

そこ行くと あたし達ときたら短命なもんでね
ガキ産んだら 途端 おっちゃんじゃうんですから
だからね 家族ってもん 知らないんですよ
知った所で区別つかんでしょうな みんな同じ顔で

人間さまとて同じでしょう
誰がどれだか 初めのうちは区別がつかない
お宅さんだってそうでしょ
あたし達 誰がどれだか分かります？

分かんない方がいいんですよ
分かっちゃったら 悲しくなっちゃうさね
知らない方がいいんですよ お互いにね
その方が 割り切れるってもんですよ

それにしても 不思議なもんですね
どうして 思い出しちゃったんでしょ
こんな時にですよ 可笑しなもんですね
もっと 他に ないもんかね

しかし なんですね
あの時の頃が やっぱりいいですね
ぬくぬくっと暮らしていた頃が
何の苦勞も ありゃしないんですからね

口をぱくぱくしてりゃいいんですから
おまんまの方から 勝手に入って来てくれて
ゆったりと こう 身体をくねらせてね
優雅なもんですよ 湖の生活は

こう見えても 友達も結構いましてね
娘衆にも もててたんですよ あたし
一匹 気にいった娘がおりましてね
相手も 満更でもない感じで

たいした別嬪さんって程でもないんですがね
なんとも仕草が愛らしくってね
こう 藻をはむ口がね おちょぼ口で
いやあ 照れちゃいますな

とは言え 恋敵も 結構いたもんですから
そこは うかうかできたもんじゃないよ
男っぷりもあげなきゃなんないし
自分の縄張りも守んなきゃなんないしでね

でも 恋敵ってのはなくっちゃいけませんね
だってそうでしょ 何でもすんなりいっちゃねえ
障害が多ければ多い程
一層 恋の炎も燃え上がるってもんでしょうが

お宅さんも 経験あるんじゃないですか
羨ましいね よっ この 色男！
て言うのもね 実はあたし 見合いでしてね
人になって 色恋沙汰がからっきしで

貧乏な小作人の倅として生れたんですがね
学校も碌々行かしてもらえなくってね
直ぐに 親方っところ出されっちまいました
打ち物師ってってね 御存じ？

倅 せがれ
碌々 ろくろく

一枚の鉄板をね 銅とか何とかをですよ
こう叩いて 回して ひたすら叩いてね
皿やら コップやら やかんやら
何だって造っちゃうんですから

所謂 職人ってやつですよ
トントントントン 開けても暮れてもね
よくもまあ 叩いてたもんですよ
何が楽しくって暮らしていたんでしょうね

えっ ていしたもんだって？
嫌ですよ 今更 お世辞なんて
それに まだまだ あたしなんか
親方に比べたら 屁みたいなもんですよ

親方の作品ってたら もうね
なんてったって形がいい とろ～ととろける様でね
それでもって 何とも言えない品があつてね
ん～ 惚れ惚れしちゃうね

お宅さんにも見せてあげたいくらいだ
人生観 変っちゃうかもわかんないよ
弟子入りしちゃったりして
はあ～ 中々 親方の域までいけやしないけどね

そんな訳で トントントントン
楽しみったら 酒くらって不貞寝するくらいですあ
そんな味気ない暮らしでしたがね
女将さんの紹介で 嫁を貰うことになりましたね

へへへ がきも二人 できましてね
良いもんですな 家族って
ええ 上が女で 下が男でしてね
あの顔見たら 疲れも吹っ飛んじゃいますあ

いや～ へへ 思い出しちゃいましたね
嫁を貰った時のこと
あの時は 可愛かったな～
こうほっぺたがね ぽちゃぽちゃとして

うん 美人なんて滅相もない
ただね こう口がね おちょぼ口で
ああ 思い出した
そうさね あの娘 そっくりさね

いやいや 可笑しいと思ったんですよ
この期に及んで 何で大事な家族を差し置いてだ
鮎なんて 湿気た頃のこと思い出したのかってね
あっ そういうこったか

湿気た しけた

うん そうさね 家のかかあですけどね
あの頃の 鮎のね あの娘だったに違いね
そうだ そうに決まってらね
お天道さんも 粋な計らいして下さいますな

家 うち

いやね そもそも あたしが人間になったのは
何も なりたくてなった訳じゃございあせんで
第一 人間なんて 大嫌いでしたね
だってそうでしょ

人の頭の上をだ 轟々と煩い音たてて
こっちが寝てようが お構いなしとくら
それに ずど～んって銃でも撃ってみなさいよ
湖の底まで振動してだね ぐらぐらって

迷惑してるの 何もあたし達だけじゃないんですよ
その度 山中が大騒ぎなんですからね
それに 釣り するでしょ
あれで仲間が何匹やっれっちまったことか

大体ね デリカシーってもんがないんですよ
あんな乱暴な生きもん やだね～
だからね なりたくなんかなかったんですよ
それがですよ まったくだ

お天道さんがね どうしてもって
お天道さんに頼まれたんじゃ 嫌とはいえねえな
一寸でいいからって 一回こっきりでね
短期の約束で 人間になったんですよ

いやね お天道さんの仰ることも
分からない訳でもないんですよ
何でも 富国強兵っての？
産めよ増やせよってね

そんでもって 魂が足なくなってきた
次から次と 子供を産むもんですけからね
おっちむ数が 生れる数におっつかなくなって
仕方ないんで 家畜に獣や鳥が借り出されて

それでも まだ 足りないってんで
遂には あたし達まで召集されちまって
全く 狂った世の中になっちまいましたよ
ひっそりと暮らすことさえ できないんですから

だったらってね こっちだって考えがあるますよ
人間には 何時も酷い目に遭わされてきたんだ
多少の狼藉働いたって 罰は当たりやしませんよ
思う存分暴れてやろうって思いましたね

でもね 長年沁みついた生き方って
そうそう変えられるもんじゃありませんね
どうもね あたしにや馴染めなくってね
虫一匹 殺せやしない

本当にね 何の因果なんでしょうかね
金属の板 叩くことしか知らない男がですよ
器量がいいって訳でもない嫁が恋しくってね
こ汚いがきでも あたしには宝物でしてね

そんな どうってことない無学な男がですよ
聞いたことも 見たこともない
言おうとしたら舌嚙んじゃうような所に来てだ
こんな目に遭わされてんですからね

こんなことなら いくらお天道さんの頼みでも
断っておけばよかったって 悔やまれますよ
でもね やっぱりお天道さんには敵いませんね
びかびかって 雷に当てられちゃっましてね

雷 いかづち

そうさね 丁度 こんな感じだったかな
家のかかあが 鮎の時分ですけどね
燃えがった恋が 今 正に 成就しよって時に
びりびりって 何が起きたか てんでさっぱりで

もう頭の前から 足のつま先までね
激痛が走るっての 息一つ できやしないんですから
正にこんな感じでね 身体中ぼろぼろになっちまって
本当にね 人になってまでこんな目に遭うとは

やだな～ いいんですよ あたしなんて
所詮 こんなもんなんですから
何になろうと 何処で生きようと
家族持っただけ 幸せってもんですよ

えっ 何言ってるんですか
駄目ですよ そんな嬉しいこと言ってくれちゃ
最後に一つ 願いをかないさせてくれるって？
駄目ですよこんな時に 情けは禁物です ね

えっ そうですか
そんなに仰るなら ない訳でもないんですけどね
ただね 一個でしょ
ね 人生最後にしての最大のね

本当？ そ 怒らない？
本当に なんでもいいんですか
ああ でもな～ でも 本当に いいんですね？
うん じゃ 失礼して

やっぱりね ね いいもんじゃありませんね
ただね 一度 撃ってみたかったんですよ
ほら あたし 修理班でしょ
まだ只の一回も 人を撃ったことないんでね

ずど～ん ってね
って あら やだ
何 怒ってんです
あなた 怒らないってたじゃないですか

やだな～ これだもん
だから 人間は信用ならないってんだ
真に受けたこっちが 悪もん扱いだ
こうなったらね お互いさまじゃないですか

って あら あららら ね
思い出しちゃったよ ね お宅さん
実は あたしね その昔ですけどね
鴨だったこと あるんですよ

お宅さんぴくついているの見て 思い出しちゃった
丁度そんな風にね 一発撃たれちゃって
つう～っと 地面におっこっちゃいましてね
後は ぴくぴくって痙攣してお陀仏ですよ

あっ あん時の あたし撃った ほら
ひよっとして お宅さんじゃないですか
いや～ 奇遇だね～
こんな所で お会いするとはね

本当 こんなことってあるんですね
あたしが鴨だったころですけどね
あっ そのお話は今度にしましょうか
あたしの寿命が こと切れるようで

ほら 向こう 鬼さんが迎えに来ましたよ
真っ赤な顔してね 怖い顔だね～しかし
うわっ 何しやがるんだ まったく
何 この人 お宅さんのお仲間？

あたしの脳みそ 吹っ飛んじゃったじゃないですか
ただでさえ 馬鹿だ 馬鹿だと言われてんのに
だから人間は嫌いだってんですよ
どうしてくれんです もっと馬鹿になっちまったら

全く 良い気がしないね
殺す方も 殺される方もね
お宅さん達 根っからの人間はどうかしてるよ
こっちは 文句言われる筋合いないってんだ

あたしゃ 金輪際 人間はまっぴらご免だね
お宅さんもね こんな無益な殺生は止めるこった
お互い 良い気がしやしね～や ね
じゃ お先に ご免なさいよ

おしめ～

遠い国のおはなしシリーズ

無益な殺生

(2015. 7. 1)

<http://p.booklog.jp/book/99186>

著者：苔田 カエル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/keronojyou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99186>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99186>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ